



カワト・橋本穂乃

中国では古来より、すべての点画の用筆を集約したという「永字八法」の考え方がありますが、科学的な根拠に乏しいため、今日では書道の方でも書写教育で定着している基本点画の種類を用いるのが一般的です。

書法の項目で、「用筆」と「運筆」はそれぞれ別のグループに属していますが、「用筆・運筆」とセットで使われることが多く、書写教育でも筆使いとして一括しています。あえて区別すると、用筆とは起筆・送筆・収筆の穂先の働かせ方、運筆とは遅速・抑揚など送筆部での筆の運び方といえるでしょう。図1は代表的な古典の用筆例を取り上げてみました。

■「永字八法」と用筆法・運筆法

伝統的な中国の書の書き方を「書法」といいます。書論の中には表1のような項目が見えます。参考のために、今日の書写書道教育で使われる指導事項の項目などを対比させてみました。用筆・運筆、字形、文字の大きさなどは重なっています。

■書論にみる書法の項目

◇はじめに
今月はまず、中国の書法の中で用筆・運筆や結構法がどう位置づけられているかを確かめます。次に、楷書の特徴を具体的に取り上げ、生活の中に生きる書作品を鑑賞します。

表1 書論と書写書道教育の指導事項との関連

書論にみる書法の項目	書写書道教育の指導事項の項目など
書法 <ul style="list-style-type: none"> 筆法 <ul style="list-style-type: none"> 執筆法 → 姿勢・執筆法 用筆法 → 永字八法 → 基本点画 → 筆使い、用筆・運筆 筆勢 <ul style="list-style-type: none"> 運筆法 結構法 → 字形のとり方、字形の構成 章法 → 文字の大きさ・配列など、全体構成 	<ul style="list-style-type: none"> ○態度・理解・鑑賞 ○用具・用材 ○形式 ○墨色など
○筆意 ○臨摹	

孔子廟堂碑		穂先を整えて軽く筆を入れる。穂先は線の上方を通りながら徐々に筆圧を加え、左上を向いた状態で止める(露鋒)。
建中告身帖(顔法)		穂先を左回りでまるめ込むようにして入る(藏鋒・蚕頭)。収筆では右回りで穂先をまるめ込んでから離す(藏鋒)。 <small>かいこの頭の形</small>
龍門造像記		波法の起筆は軽く藏鋒で入り、徐々に筆圧を加える。収筆では左上方に穂先を集め、そのまま右横へはらう(燕尾)。 <small>つばめの尾の形</small>
		垂直にえぐるようにして鋭く入る。収筆では線の上端に穂先を集めてから下方または右上方に向けて鋭く切る(方筆)。

図1 代表的な古典楷書の書き方

■楷書の特徴

楷書を隷書と比較すると、三過折の骨法を有する他に、次のような特徴があります。

- ①横画が右上がりとなり、均衡(重量的なバランス)の原理によって安定を図る。
- ②斜画が増加し、求心性が強くなる。
- ③収筆の連続性が高まり、「とめ・はね・はらい」が区別される。



常葉大学教授
本誌編集委員 平形 精逸

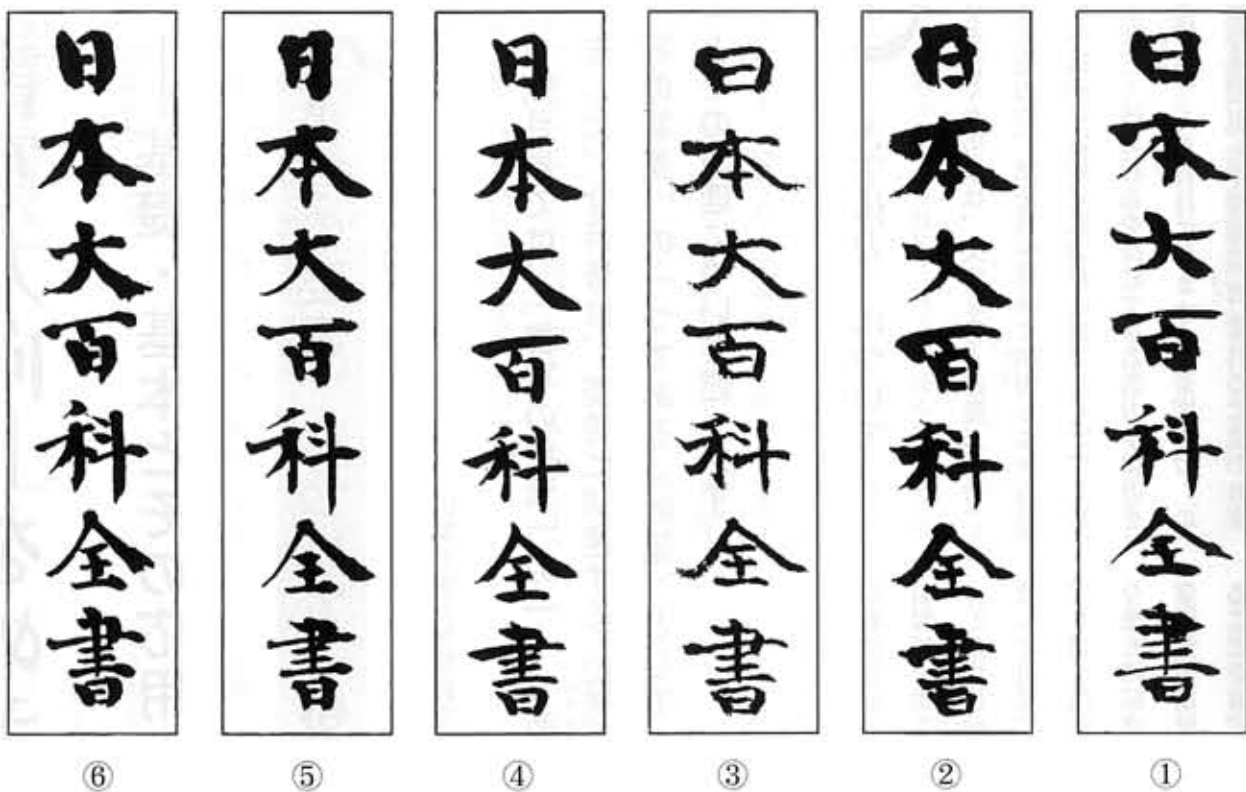


図2 (鑑賞資料) 青山杉雨先生 書

- ① 六朝時代の写経文字
- ② 六朝時代の造像銘
- ③ 六朝時代の摩崖文字
- ④ 隋時代の楷書
- ⑤ 初唐の楷書
- ⑥ 唐時代の顔真卿書法による楷書

■生活に生きる楷書

上掲の「日本大百科全書」は、同書が発刊(小学館、一九八四)されるにあたり、青山杉雨先生(文化勲章受章者、一九一一—一九九三)が二十六種類の古典を倣書された題簽のうちの楷書六種です。「倣書」とは古典の特徴を生かして別の文字を書くことです。同一文字なので、それぞれの古典の特徴を鑑賞するのに恰好な教材にもなっています。左の梅原清山先生の書は石刻、新井光風先生の書は木板の墨書で、各々六朝書の魅力を遺憾なく発揮しています。



《新井光風先生 書》



《梅原清山先生 書》

■結構法

字形のとり方は、書法では「(間架)結構法」と呼ばれています。高等学校では「文字の構成」といいます。両者は表2のような関係で、かなりの項目が重なります。ここでは重要ないくつかを取り上げます。

〈概形(外形)〉

篆書が縦長四角形、隸書が横長四角形であるのに比して、楷書はほぼ正方形である。細かく観察すると、初唐楷書は右方拡大の垂直台形といえる(左下図参照)。

表2 結構法と字形のとり方との関連

結構法	字形のとり方(構成)
中心・概形	中心・概形
間架・分間布白	画間 長短・方向・交わり方・ 接し方
相讓相避	組立て方
向勢・背勢	(構え方) 直勢
減勾減捺	(許容の形)
均斉・均衡	均斉・均衡
○九宮法	(重心のとり方)

〈中心・重心〉

文字の中心は対角線の交点であるが、重心は視覚上の力の集約点で、感覚的に把握できる。初唐様式と六朝様式とでは、基調画が異なり、重心の位置も対照的である。



「九成宮醴泉銘」
基調は縦画。重心高い。



「張猛龍碑」
基調は横画。重心低い。

なお、上下から成る文字などは、右上がりの体制を保つために、既に書かれた上部を下部を支えるので、下方を少し右へずらしてバランスをとることになる。古典楷書の構築性を高めるための重要な原理で、これを「重疊法」という。



〈分間・画の長短〉

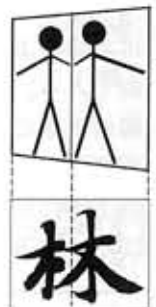
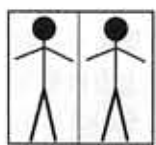
平行・等分割は空間を秩序づけるための基本的な要素で、書写・書道においても重要である。古くより「分間(布白)」「分位法」や「間架」などともいわれ、楷書だけでなく他の書体にも適用される。

画の長短は、開放部分を含む文字に対して安定を図るための不可欠な字形要素である。水平方向における一画(一対)強調は波磔のつく隸書の横画などに由来する。

〈相讓相避法〉

部分と部分から成る組立て方の文字は全体の九割に及ぶが、中でも「左右」は半数を越える。この場合、それぞれの点画を譲り合って、文字の中心に寄せて一体感を強める。

また、横画などの右上がりによる空間を抑制するため、つくりはへんより拡大され「左小右大」となるのが一般的である。



隋 真草千字文